



針葉樹會報

通卷第六十八號

鳩待峠を越へ至佛狩小屋を経て水上へ

ク

マ

今年は夏の山旅をすつかり諦めてゐたが會社の海濱寮の方で二日休みが餘つたので日曜を入れて三日、あれかこれかと色々考へた擧句アラインゲーエンぢや危険な所も嫌なのでまだ一度も訪れた事のない尾瀬の旅をやつて見る事にした。

夜行で上野をたつて沼田が午前三時少し過ぎ、六時まではと覺悟してゐたバスがこの八月一日から上り列車を待たただけで直ぐ出て呉れたのは意外だつた。追貝鎌田を過ぎる頃漸く夜も明けて來て地圖からは一寸想像もつかない長閑な沼田街道をバスは走つて行く。此の片品村は日本一の兵隊村だ相で今度日支事變にも親子で出かけてゐる家もあるとの事、五時に古仲に着いた。戸倉から三平峠へ行くさいふ四人連れの人達と別れて獨り笠科の水上へと向つた。

そばや麥の畠の中のさゝやかな徑を堂平山の東側にさしかゝる頃片品川の對岸の山の上に朝の陽がのぼつて來た。草茫々たる十二平の真中に戸倉への道標が淋しげに立つてゐる。平を過ぎて一寸登ると大きな樹の下に石の祠がある。こゝで寫真機にフィルムを入れなどして少憩した。笠科川に沿つてつけられた木の下徑は槍澤の林道や秩父の昔の徑を思はせる所が所々にある、獨り旅にこそ相應しい靜かな寂しい間道である。西栗澤の小橋を笠科川のそれと間違へてハテナと思つたが直ぐその錯覺はさり戻す事が出來た。笠科の本流を渡る橋は三つさも立派過ぎる位のものだ、やがて小赤澤に來た、睡眠不足がたゞてどうも足が元氣に動かない、澤の石の中に旨い具合に腰をおろして一服してゐるさいつの間にか睡むつてしまつたらしい。たぎち落ちる澤の音と青い空から吹きおろして來る爽かな風に遂夢現の間に放浪つて行つてしまつたらしい。眼が覺めて見ると暫くは自分は一體何處に居るのかゞはつきりしない位であつた。煙草を吸つてゐた筈だがと四

邊を探したら半分許り吸つた残りが岩の間におこつちてゐた。

ザグザグのアテ坂の登りも夏の陽を脊にしては中々樂ではな
い、廣い平に出るさ笠ヶ丘(大高)がほんさに一連の平な稜線の上に
笠を置いた様にポツト高くなつてゐる。九月末から十月にかけ
て此の邊へ來たらどんなにか紅葉が美しい事だらう。そんな事を
考へながら幾つかの小澤を過ぎやがて平な鳩待峠の頂上に出た。
ただつびろいだけで何の風情もない草いきれのする峠である。匆
々にして川上川の側へさ下る事にした。

森が深いので直ぐ前の至佛も餘りよくは觀察出來ないが御山澤
アル澤一帶の斜面はせゝこましくなくつてよい、冬のスキーを思
はせる事思はせる事。

明るいヨセ澤の畔で水を呑みながら一休み再び樹林の間を
川上川に沿つて行く、一度河原に出た所で靴下を左右取換へる爲
めに休んだ、ほてつた足を冷たい只見川の水源に涵す、何さ云へ
ぬ感觸、脊髄にビリット來るやうな引緊つた感じだ。川上川を横
切つて又暫く樹林の間を辿ると突然戰場ヶ原のやうな廣い原つば
の一端に出る。之が尾瀬ヶ原なんだと思ふと急に懷しさが胸一
杯になる。學生時代から何時かは來やう來やうと思つて遂に見る
機會のなかつた尾瀬ヶ原へ來たんだ。

草の名前はわからないが二尺位に延びたのが一面に原一杯に生
えてゐる。原の眞中の踏跡を辿つて行くさやがて至佛への徑が左
に別れ又少し先に日崎越へ狩小屋徑が左に行つてゐる、そして山
ノ鼻の小屋はその儘東へ行つた唐松林の向側にある。

此の小屋は無人大と思つたらちやんさ番人がある。片品村の所

有物でお爺さんが一人、中老と中媼と男の子が一人の四人暮しだ
監視人何の誰がしとは書いてあるが皆親切な人達許り、二時前に
着いたので一眠りしやうかと思つたらおばあさんがまだば、えから
原さ見物して來るが、いゝがなモシーといふのでそれもさうだと思
つてカメラ三脚を持つてブラ／＼川上川の下流の方へ行つて見
た。燧が均整のされた格好で原の中央にどつしり控へてゐる、振
りかへるさ至佛も西の空を悠然と限る。ほんとに尾瀬はいゝ山を
二つ持つてゐる。唐松、櫟、檜、岳樺、白樺と原をめぐる樹林は
黒々と限りなく續く。

夜は來合せた三人の登山者と爐の火を圍み乍ら色々山の話をし
た。さりたての大きな岩魚を塩焼にして貰ふ。夕方這入つた野風
呂もいゝ思ひ出の一つである。月が出たさいふので一人で至佛に
近い原の方へ行つて見る。野風が周章で、左右の叢へ逃げ込んで
行く、眞黒な唐松の大枝の間に満月が皎々と明るい、原の面はは
てしなく白い花がぼんやりと霞んで夕靄との區別がつかない、遠
くに白樺が二、三本浮き出てゐる、耳を澄ますと夏蟲が今宵を限
りさばかりに鳴き競ふやう、ほんさにもう夏も終りなんだと思ふ。

× × ×

昨日の登山者も今日は至佛を往復するといふので一緒に行く事
にする。私は荷が重いので少し先に出了たが直ぐ退ひつかれて了つ
た。原の眞中を突切つて徑は直ぐ森林帯に入りザグザグなしに眞
直登つてゐる、草地に出る頃そろ／＼朝の霧も動揺して來て尾瀬
ヶ原が惜し氣もなく展開する。燧はこちらの高くなる程いよく、
高く秋も近い澄んだ空にいかつい尾根をそゝり立てゝゐる。私は

もう之で充分満足した、こゝへ來て尾瀬も燧も見えなかつたりした。たら全く來た甲斐がない譯だ。

頂上に着いてゆつくり晝めし、展望をやる。八海、中ノ岳、駒ヶ岳は孫さんや近ペン宇佐美と一緒に往つた懐かしい山々である、流石にまだ雪がある。谷川岳の附近の谷底にも残雪がある、一の倉谷の立壁がものすごい。狩小屋澤の下りは瘡にさはる程長くて嫌な徑だ、少しも落付いた所のない徑である。小屋から先は平ないい道となる、檜俣の流れも物靜かで氣持ちがいゝ。ヘエズル澤を過ぎシトリユ澤で四時半になつたのでビーヴァック、立派過ぎるシュラフザックのおかげで暑くて一睡も出來なかつた。

最後の日は雨の中を八谷越へをやりず濡れの儘湯の小屋温泉につき一風呂浴びて中途半端な飯を食ふ。平面の時のやうに美しい女性と湯を共にする事は出來なかつたが兎に角湯の小屋は靜かでない。

上の原の道は通らずトロ道を忠實に藤原の横山へ出てバスで水上へ、四時何分かの上りに乗つて歸京した。

檜俣川と利根川の合流附近は實際何とも云へぬ溪谷美をなしてゐる。湯の花温泉への籠わたして増水の爲め一人村の人が流された許りの所へ通り合せたのだがあの濁水とうゝたる流れを見てゐるさ凄愴の感がひしと胸を打つ。湯の花へ行くにはこの渡しを渡る必要はなく十分許り上流に（殆ど合流點の所だ）氣持ちのいゝ釣橋がかゝつてゐる。

木の根川（湯の小屋谷）が檜俣に落ちる所の洞元の瀧といふのは實に凄いい、太い流れが巨岩に押されてれじれながら二段位にな

つてゐるらしい、見て居ても吸ひ込まれるやうな氣持ちがした。檜俣の濁流にも所々瀧見たいなのがあつて相當な谷である。此の邊一体に大人しく合流する支流といふのは一つもなく殆ど瀧となつて落ちてゐる。檜俣、或は利根の如何に浸蝕の劇しい急流であるかゝわかるだらう。

（以上）

十 五 首

K

生

（一） 海 に て

朝風の渚靜けし霧深き海の面に鳶ひくゝ舞ふ
暫くもつさめ忘れて海行かむしかすがにして心浮き來ぬ
地曳網の桶二つ沖に浮び居てあしたの海は靜けかりけり
朝霧の深くこめたるこの海の靜けきをわが獨り歩みぬ
おしなべて若きにかへり砂にまろび砂にころぶす一日は嬉し
たそがれの海のそぎへに横はる島かげ淡く暮れ行けるがも
夜半にして片割れ月の砂丘すなをの上にかゝるも今宵かぎりか
潮満つる濱の夕べの渚じを月をそびらにもだし歩みぬ

（二） 山 に て

山もはや秋さはなりぬ白雲の澄みわたりたる光の中に
われをへだつ尾瀬の原もの遠けれど燧ヶ岳はいやさやに見ゆ
寂しさに堪へてし行かば深山路のおのが姿のおもほゆるかな
高原は遠白々さ薄ぐれて今をしきなく夏蟲の聲
頂にころぶし仰ぎ行く雲の流れに悠久こわの姿をぞ知る
限りなく夕靄こむる高原に白樺淡く二、三本立ちぬ
雲の行き遙るばるしもよ毛の國と越後の山はひき續きたり

奥又白谷生活 (一)

日江井正己

短かいけれど實際長い様に思へた第一期の試験が終る途端に霖雨の爲に折角の山行も延期され、その間部屋に日参してザイルにワセリンを塗つたり、冬の合宿に入用な品數個の荷造り等をして、出發は十八日の夜になつてしまつた。數日來賑かだつた應召の兵士達の姿も減じ僅かにこの汽車に乗るものは四五人に過ぎなかつた。

列車は案外に混んで座席取りに大童どうにか取つた。どうせ寢られぬ列車の中と思ひつゝもさうくさ寢たらしい甲府に近い、後の座席に居る應召兵の御内儀さんが二人お互に夫の身を案じ、もし死なれたら、なぞと淋し相に話してゐる。傍ではまだ五才位の男の子が初の汽車旅で慣れないのか窮屈相にれてゐる。多分松本の聯隊へでも夫に面會に行くのであらう。僕は妙に暗然となつてしまつた。勇ましい夫の影にかくも淋しい妻の姿があるを見て鹽尻近くなつて來るとアルプスの前衛山脈が白い雪を戴いて見えて來た。松本で電車に乗りかへるさ空は曇つてゐるが鹿島鎗の眞白な姿が意外に近く見えて我々を湧立たせる。自動車は御客の少きをこぼし乍らも結構満員になつて走りだす。兩岸の紅葉は美しく、身の寒さを覺える頃漸く焼の勇姿が眼前に表れ上高地の近きを知る。河童橋で下ろされるさ先づ二ヶ月前の上高地さはまるで變つて居るので驚く。穂高は新雪の薄化粧をし、岳川の草は皆こげ茶色に枯れて美しい。西糸屋に入つて休んでゐるさ一台自動車の後れた森川兄來り三人で出發する。小梨平はがらんとして、

落葉のせいか妙にだだつびろく見える。例の道を例の所で休み例の如く徳澤へ着けばスケさんは大瀧へ遊びに行つたとの由、人の居らぬ徳澤で歡待をうく。助さん歸つてから色々荷の整理を行ひ夜風呂に入つて、東京ではまだできぬ炬燵氣分を味はひつゝ、溫かいシユラフにもぐる。

あくれば二十日、見事に晴れて一點の雲影を認めずさいひたい位だつた。九時半に小舎を發して、梓河原を歩いて奥又白谷本流に入り、まず新雪の穂高へと一步一步を進めて行く。寒いさはいつても七貫餘の荷では直ちに汗苦に襲はれる、急ぐ道程ではなし勝手知つたる道故、皆も一回休むさ仲々御腰が上らぬ。やつとルンゼ下に着く時に一時半こゝでも美しい落葉松の紅葉や魅惑的な北尾根の新雪等を賞してゐる間に時は勝手に過ぎて行く。かくては果てじとてやを立ち上れば荷背にこたへてこれより急阪續きの上りが思ひやられる。けれど夏よりはかなり歩き良くあまり不愉快な思ひをせず池に到着する。池の附近は、はだれ雪が残る池には薄氷が約半分水を覆うてゐる。天幕を張り終へて落着くさ俄かに空腹を催す、今晚はスタート會を稱して美食する事にする。散々食ひあきて天幕を出るさ猛烈に寒い、十三夜の月光に照らされた前穂と新雪は又たさへ様のない位素晴らしい。梓河原には河霧だらうかぼんやり白いものが浮遊してゐる。明日の好天を祈りつゝ寢に就く。

明二十一日快晴、五時起床、今日は僕と森川兄と前穂フェイスへ、助さんと大塚は四峯フェイスへさ決定して今度試験的に仕入れた怪しげなオーツで腹拵へをして出發する。又例のトラヴァー

スで苦しむかと思つたが、アツシユが枯伏してゐたので樂に奥又白本流に入る事が出来た。本流には相當雪があり場所に依つては二尺位あつた。そこで助さん達のパーティーに別れ僕等は本流を溯つた。先づ第一の難關瀧の所で一時間許りを使ひ岩に取りつたのが一時半頃になつてしまつた。夏登つたルートよりもう一段下のテラスに登る事にした、いざ取附いて見るゝ案外雪があり相當苦勞した。

殊にこのフェイスは午前一〇時頃になるゝもう太陽の恩恵から見放されてゐる岩壁故始末が悪い。四峯のフェイスをやつてゐる人々は皆愉快相に惡場を終つて休んでゐる。我々もどうやら第二のテラスへの登攀部へ來た時ほつと一息つくゝ、我々の天幕が池の畔に小さく我々を招いてゐる、見上げる前穂の岩壁はあくまで黒々さ、癪にさばる位高く聳えてゐる。これから腰を上げて登攀にかゝれば案外良く無く、僅かに百米位の所で約三時間半位使つた。その間は本當につらかつた。日影故に氣温は下る一方、トツプが仲々進めないでラススの寒さはひどくなる一方さてトツプに確保されて自分の登攀の番になるゝ手がかちかんで始末が悪かつた。第二のテラスの直下の惡場に又々三十分を費してテラスについた時はもう薄暮ハンマーを振ふたびに美しい火花が散る。僕はそれ前から腕がやたら疲勞するので弱つてゐたし試験直後でトレイニング不足のせいであらう―最後の惡場では淺ましい位のびてしまつた。夕やみは逼る、我々はさもなく天幕を出てから何も口に入れてないので晝食用のパンを取出して食つた。そして天氣が良いのを幸ひまだ先もある故もうすこし良い場所を見つけて

ビヴァークする事に決した。第一テラスと第二テラスとの中間に恰好の地を發見ハーケン二本にザイルをかけ一方で二人を確保シユラフに足なつゝみ尻革を敷いて先づビヴァークの用意は出來た時に七時もう日は既に沈み、蝶々岳の後の方からは圓い月が出んとしてゐる。なつかしい天幕の光が見える。互に「ヨソホー」を呼び交して今夜は天幕に歸らぬ旨を知らせる。向ふの奴等も判つたらしいラムプは消えて又靜かになつた。月が出た!! 四方は忽ち明るくなる、奥又白谷は足下に純白な雪を載せて梓川に連り、周圍の岩壁は黒々さ覽物の様な姿態を月光に曝してゐる。一時頃天幕の人等は寢たらしい。あゝは靜かだこの穂高で起きてゐるのは僕等二人だけなのだ、さすが空腹がこたへるしかし残つてゐるパンを食つてしまふと明日の朝の食料の欠乏は明かなので涙を飲んでやめる。暖を取るためにあらゆる知つてゐる歌を聲を張上げてこの岩壁から叫んだ、幸ひ少しは暖かくなつたが却つて空腹を催しつひにやめてしまつた。しかしそれに由つて一時間許り時間は過ぎ〇時になる。

シニオルチエ登攀 Siniolchu—6,981 m. (一)

『一九三六年と云ふ年は只にその遠征隊の數、又その國の種々なる事に於てのみならず、遂げられた成功に於てもヒマラヤの登攀史上忘る可からざる年である。』と云はれてゐる。實際昨年は大きな遠征隊のみでもエベレスト(英)、ナンダデヴィ(英米)、シツキム(獨)、ヒドウンピーク(佛)、ナンダゴット(日)、中央ヒマラヤ(スイス)等六ツを擧げる事が出來、其他にも約十數の小規模な遠

征隊を數へる事が出来る。シニオルチュの登攀はドイツのシツキム・ヒマラヤ遠征隊によつて成されたもので、此時にシムヴ北峯（六五四五米）も登攀せられた。以下に抄譯したのは隊員の一人たる Karl Wien の筆になるもの（H.J. ix, 1937, pp. 58—73）。（因にウィーンは本年ナンガ・バルバットに於て遠征した。）尙針葉樹第九號所載の「シツキム概念圖」を参照せられたい。

望月達夫記

×

×

×

最近ドイツでは東部西部の兩ヒマラヤに大規模な遠征隊を計畫中であるからして、吾々は本年（一九三六）、カンチエンゲンが若しくはナンガ・バルバットの何れにも遠征を試みる譯にはいかなかった。けれ共ドイツ・ヒマラヤ協會としては此の一年を無爲に過すにしのびず、シツキム・ヒマラヤに偵察的なる小パーティーを送る事に決定した。この目的は曾つての日吾々の仲間がナンガバルバットにて敗北して以來（註、一九三四年のメルクル隊の遭難を指す—本會報 54 號參照）、さかく吾々は不活潑な状態にあつたが、今一度ヒマラヤに於る諸々の條件に慣れること、更に明一九三七年に於けるナンガ・バルバット遠征に於て役立つべき事柄を研究することであつた。そこでカンチエンゲンが山群中大體セム氷河から登り得べき六〇〇〇米級の峯々の中何れかに登り、更に未探險地域たるシニオルチュの東面、南面を踏査する計畫をたてた。吾々は又一九三一年（第二回カンチエンゲンが遠征）の時なしたセム氷河の測量を續行する希望も有してゐた。

この小パーティーは Paul Bauer を隊長とし隊員は Adolf Güttn-

er, Gunter Hepp 及私の三人合計四人であつた。極く最近の状態殊に一九三四、三六兩度のナンダヴィ遠征、一九三五年度のエベレスト偵察行の結果から判斷するに、かゝる僅少なる隊員と少數の人夫衆よりなる小規模な且可動的遠征隊の方が、かへつて相當大きな成果を収める事が出来ると思はれたのである。最初からしつかり結合せられ、且人夫衆の助力なくしても或は又いざと云ふ時は自ら荷物を脊負つても立派に活動し得る、かゝる小パーティーは、天候、積雪状態等の變化に對して容易に順應してゆけるのである。更に一定の巨峯登攀を目的とするよりも、むしろ或る未到達地域の踏査を目的とする此度の如き偵察行には、費用の點から見ても小パーティーの方が有利である。故にパウエルが此の年たつた三人の仲間と出發することになつたのは、決して偶然ではない。しかのみならず出發時より、此の偵察行は小ぢんまりした遠征隊の成功率の高いことを試る可能性も有してゐた。

將來ヒマラヤの遠征が益々發展するにつれて、かゝる小規模な遠征隊の果すべき役割は重且大なりと吾々は確信してゐる。が最も高き峯々に就いて云へば、小パーティーにも自ら限度のある事は次の事で説明されよう。（一）登攀隊の成功はかゝつて堅實にして準備よき根據地（B・C）と、常に仲間の援助を與へ得ることに存する。（二）高所天幕からの需要に速に應じうべきこと。（三）極度に高い地點に於て隊員の肉體的變化は顯著にして、きまつて落伍者が出ること。故に之等の點に大パーティーと小パーティーとの歩み寄りが考へられねばならぬ。そして一遠征に際し知何なる大さのパーティーを組織すべきかと云ふことは、その時のリーダーシツプの

巧拙如何に左右される。一般的結論としては根本的考察からは勿論、經濟的考察からも可能的小パーティの方があらゆる點に於て優利であると言ひ得るのである。

更に荷物を可及的少量に限定することも亦缺く可からざることである。と云ふのは荷物が多ければそれだけ多數の人夫を必要しかくして遠征隊は思はぬ煩雜さを蒙り、その費用も莫大なものとなる。少人數の時は登攀隊員も彼自身の重荷を自ら擔つて行かれなければならない。而もこのことはより高所の天幕に於ては特に不可缺のことで、かくして万事は簡單化せられるのである。

八月六日吾々は海路カルカツタに到着、豫定の如くガントクにて自動車を経てテイクチュ、チュンゲタンを経てラツチエンに至る。その後ゼムの氷河に入り約四五〇〇米の地點にB・Cを設け、ラツチエンから引具してきた土着の人夫を解雇し六人の者のみなのこした。

B・Cの南方にはシニオルチュが雄渾な姿もて聳立してゐる。その姿の華麗さに於て、雄大さに於て如何なる山もシニオルチュの敵ではなからう。かの有名なるフレツシユフィールドは夙にこの山を目して、此の世界に於る最も美しき山と云つた。第一回カンチエンゲンが遠征(一九二九年)の時から、この山の印象は強く吾々の腦裡に刻まれてゐる。その時仲間の中一人でもこの山を試み様とする者は無かつた。あらゆる山側は總て登攀不可能であり、登攀者の眼は只空しくその山稜山側上に望なきホールドを求めてゐるのみであつた。

一九三一年第二回カンチエンゲンが攻撃の折も吾々はカンチ

の東北稜よりこの山を見てゐた。この時やつとこの山に對して登攀しやうと云ふ考へが臆氣乍ら起り、毎朝山露に包まれて了ふ前吾々は登路に關して研究を怠らなかつた。吾々が偵察した限りでは西方尾根は比較的可能性がある。若しこの山に登攀の可能性があるとせば、この西尾根以外には絶対に無いであらうと云ふ結論に達した。

かくて吾々は時機到來したことを喜んでゐたが、八月中旬より九月上旬へかけて天候不順の爲シニオルチュ東面の踏査に幾日かを費し、その間ヅムツウ氷河(シニオルチュの東南)とバツサンラム氷河をと分つ尾根上、吾々がククール・ギャツプと名附けた鞍部に登り、更に八月廿一日にはヘツプ、ゲットネルの兩人はリクロ北峯(五八〇〇米)——シニオルチュとラマ・アンデンの中間にある最高點——に登頂した。かくして一度B・Cに戻り更にテント・ピーク(七三六三米)を試みるべくネパールギャツプに登つた。九月十日ゲネットネルと私はネパールピーク(七一八〇米)に登頂し更にテント・ピークへ前進したが雪の状態が極度に悪く、足下から雪崩が発生したりしたので退却せざるを得なかつた。かくして再度B・Cに戻り悪天候の間中、シニオルチュ登攀の爲待期した。

兵營よりの二書簡

(鷹野雄一君筆)

拜啓 隨分長いこと御無沙汰してし、ひ申譯けありません、皆様お變りありませんか、私は御想像通りピンピンして軍務に勉勵致して居ります故乍他事御安心下さい。愈々また秋が訪れて來まし

た。諸兄の活躍されるシーズンも近づいて来たわけですね、今年もどうぞ御健康で心ゆくまで山を味つて戴きたいと思ひます。

それから諸兄の御苦心の編纂になる「針葉樹九號」先日父に持参して貰ひほんの少し拜見しました、現在手元に置くわけに行かず其の儘になつて居りますが中々立派ですね、其の中にゆつくり拜見させて戴く心算です。時節柄會報等へ原稿を送る事も出来ず失禮致して居りますが何卒御許し下さい。時局重大の折柄新宿等も淋しい相ですが如何です？ では又何れゆつくりお便りしませう。

早々

九月十四日

松本歩兵第五十聯隊幹部候補生教育隊

鷹 野 雄 一

一橋山岳部宛（端書）

× × ×

拜啓 愈々冬山のシーズン、兵營から見える常念、大天井にもうつすら新雪が來ました。前山越しに點々見える槍の穂先や穂高の尾根は眞白、乗鞍は位ヶ原の上部はスキーが使へさうです。此の間有明へ行つたら後立はすつかり冬姿 夕陽に輝く鹿島槍の素晴らしい景觀にも暫くぶりで接しました。

乍併小生こゝ山とはまるで關係のないことに毎日々々を送つて居ります。事變の將來性を考へるとき小生の余生も幾何もあるまいとも考へられます。死ぬ前に一度は氷河を歩いて見たかつたんだけれど――

末筆乍ら諸兄の山行が諸兄の理想に向つて一日々々と發展して行

く事を祈つて筆をなきませう。

敬具

松本五十聯隊幹部候補生教育隊

鷹 野 雄 一

一橋山岳部宛（十月廿三日附端書）

記 録

○鳩待峠―至佛狩小舎―水上（八月二十日―二十三日）

吉澤 一郎

○小御岳（九月二十五・六日）

林 俊 介

○大菩薩峠（十一月八日）

柿原 謙 一

消 息

村尾金二君 オトツチャンになられました。

清水達雄君 中野區塔ノ山町九番地へ轉居。

岡田謙三君 兵庫縣武庫郡本山村北畑字横田一九七番地へ轉居

定例集會 九月廿一日 於如水館

出席者（會員）吉澤、渡邊、村尾、矢作、近藤、金田、久保田

山口、吉澤松、園山、増山、小柳、林、新羅、柿原、

（部員）望月、小谷部、小林、森脇、佐々木、榎本、原、岩崎

船本、日江井、里見、木島

榎本の新作劍澤合宿の八ミリを觀賞して、大變に愉快だった。

定例集會 十月十三日 於如水館

出席者（會員）吉澤、村尾、近藤、吉澤松、高瀬、園山、林、

新羅、宇佐美、（部員）望月、森川、船本

編輯後記 山岳部報告は略して次號に掲載します。